

## 「サロン」文化と女性詩人の誕生

海老澤 邦 江\*

アイルランドにおける「サロン」を考察するにあたって、特に留意を要する点がある。アイルランドが18世紀に連合王国として英国に併合される以前、遡ること12世紀以降から英国の政治上・経済上の支配を長く受けた史実により上流階級・貴族階級の社交場として「サロン」が英国のそれと同様の意味を持ち、または、社会で果たしていたその働きも英国の場合と同一線上に考える傾向にある、あるいは両国の「サロン」の在り方の違いに十分な注意が払われてこなかったという点であろう。

21世紀に入ってから、日本においても18世紀における文芸的・文化的研究に光があてられるようになってきた。これまで、シェイクスピア以降、ミルトンを中心とした17世紀、そして18世紀後半のロマン主義を中心とした研究、ヴィクトリア朝からモダニズムの20世紀の文芸批評の流れが常識となっている。この流れの中で、英国18世紀が現代的視点からクローズアップされる領域は、「小説」の誕生であろう。この時代に、フィクションが市民権を得、上流の知識階級のみならず、経済力を持ち始めた中産階級の人々からの支持に支えられ、その読者層を広げてゆくのは周知の通りである。そうした知の領域の拡大に従って、文芸に強い関心を寄せ、自らもペンを持ち自己表現を試みようとする女性が、次々と現れるのもこの時代である。その揺籃の役割を果たしたのが、「文芸サロン」である。英国においては、モンタギュー夫人(Mary Wortley Montagu, 1689-1762)を代表とする「サロン」が数多く生

まれ、活発な活動を行ったが、19世紀に入ると急速にその活動は衰える。

一方、アイルランドの状況はどうであろうか。実は、18世紀アイルランドにおける「サロン」の活動は、残念なことに日本ではあまり知られていない。かつ、英国を主としたものはあるが、直接関係ある研究もほとんど見当たらない。しかし、19世紀後半に一人の女性、グレゴリ夫人(Lady Isabella Augusta Gregory, 1852-1932)の登場によって、アイルランドの「サロン」は一躍注目を浴びることになる。それも、従来の「サロン」ではなしえなかったであろう、質の高さと社会的影響を20世紀初頭まで維持するのである。あたかも、突如、誕生したかに思える「サロン」であるが、実際は、その伏線となる「サロン」は存在した。それは、フランスや英国の「サロン」から何らかの影響を受けながら、アイルランドで静かに、そして徐々に本格的な「サロン」誕生の土壌を醸成していったとも言えよう。

本研究では、まず、こうした「サロン」の誕生の経緯、「サロン」の性質、歴史的ならびに社会的役割と機能を概観し、その見取り図の中で、グレゴリ夫人の「サロン」の特質を考察する予定である。今研究ノートでは、サロンの基本的な概観を把握するために、文末に掲げた文献を中心に考察する。その上で、英国における本格的な女性詩人の先駆けとも言える、ウィンチルシー伯爵夫人アン・フィンチ(Anne Finch, Countess of Winchelsea, 1661-1720)の作品から伺える、文筆に関わる概念、つまり女性が自己表現として文筆を行うとはどう意味を持っていたのか、17世紀から18世紀初頭の「書く」行為とその意味を検討する予定である。ウィンチルシー伯爵夫人と同時

2019年11月30日受付

\* 江戸川大学 情報文化学科教授 英詩、英語圏文学、文化比較

代、それより早くに文筆家として名を後世に残しているのはアフラ・ベーン (Aphra Behn, 1640-1689) が存在する。彼女の場合は宮廷生活の環境から文筆家の才が認められたわけではない。しかし、17世紀にあって、文筆によって経済的自立を早くも目指した稀有な例である。彼女の著した『オルノーコ』(Oroonoko, 1688) が、英国で初の女性職業作家の代表作といわれる所以である。英語圏文化・社会の「サロン」文化の系譜・系統とはいささか異なる筋から誕生した異色の存在なので、同様の土俵で論じるのはむづかしい。「サロン」文化から誕生した英国の女性文筆家という観点から、現代ではあまり論じられる機会を失った、アン・フィンチを改めて取り上げるのは的外れで無益な考察ではないと考える。フィンチの「書く」行為に関する思想を実作品から検討する際に、彼女の生涯と評価の知識は示唆に富む内容を多く含んでいるので、その生涯とロマン派による再発見に至るまでの作品評価の変遷を概観する。

まず、アン一族は12世紀ジョン王の時代からエドワード1世、16世紀のヘンリー7世そしてスチュアート王家に代々仕えた旧家である。父ウィリアム・キングスミル (William Kingsmill) とアン・ヘイゼルウッド (Anne Haselwood) の次女として1661年にアンは誕生するが、父ウィリアムがほどなくして病死する。翌年1662年には、未亡人となった母アンが他家に嫁ぎ、残された姉妹とアンは、母方の叔父の家で養育されたようである。歴史家グレゴリオ・レティ (Gregorio Leti, 1630-1701) の記録によると、1682年当時デューク侯だったジェームズ2世の妻モデナのメアリ (Mary of Modena, 1658-1718) 付きの6人の侍女の一人としてアンの名がある。この記述以外、成人に達するまでの記録は一切ないために、彼女が21歳までの履歴については不明である。

宮廷生活を送る中で、デューク侯付きの銃隊隊長を務めるヒネージ・フィンチ (Heneage Finch, 1657-1726) と出会い結婚、宮廷を辞す。1688年の名誉革命により、ジェームズ2世が王位を追わ

れた後も、ジェームズへの忠誠を曲げずプロテスタントへの改宗もしなかったために、すべての公職から追放され困窮生活を送る。甥のウィンチルシー伯爵チャールズ・フィンチ (1671?-1712) の招きによってイングランド南部のケント州イーストウェル (Eastwell) に居住するが、甥チャールズの死亡によりヒネージが爵位を継ぐことになる。政変によって二人の生活は大きな変化を余儀なくされたが、私生活についてはあまり知られておらず、子供がいない二人の生活は比較的穏やかであったらしい。夫ヒネージは考古学的趣味を持ち明朗快活な人物であったらしく、一方の妻アンは文学の深い教養に恵まれ、当時の有名な文人たちと交流を持ちながらも、深い憂鬱症に悩まされたこともあった。

さて、アンが現代に到るまで詩人として名前を残すことになった流れを簡単にスケッチしてみる。18世紀初頭には、文人として名声を獲得していたアレキサンダー・ポープ (Alexander Pope, 1688-1744)、ニコラス・ロウ (Nicholas Rowe, 1674-1718)、ジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift, 1667-1745) らの知遇を得ていたらしく、アン作品をアンソロジーに採用、彼女の詩への言及がある。1713年に『ある夫人の詩文集』(*Miscellany Poems by a Lady*) を出版するが、その後およそ100年間忘れられた存在となった。アンが前ロマン派の自然詩人として脚光を浴びるのは、やはりワーズワス (William Wordsworth, 1770-1850) の高い評価に負うと言える。

ウィンチルシー伯爵夫人の「夜想曲」とポープの「ウィンザーの森」の数節を除けば、『失楽園』から『四季』が発表された間に生まれた詩人には、外界の自然を表す新しいイメージがひとつも見当たらない。詩人の感情が詩人を駆り立て、想像力の真髄の中で外界の対象に働きかけた兆候は言うに及ばず、詩人の視線がその対象にしっかりと据えられているとわかる馴染み深いイメージが全く見出せないと言ってよいのは驚くべきことだ。

(ワーズワス『序曲』(*The Prelude*, 1805)の序文より)

この指摘を受け、19世紀の著名な文人・批評家リー・ハント (Leigh Hunt, 1784-1859)、ゴス (Edmund Gosse, 1849-1928)、ダウデン (Edward Dowden, 1843-1913) 等がアンの作品を紹介した。また、20世紀初頭には、アンの全詩集 (Myra Reynolds, ed. *The Poems of Anne Finch Countess of Winchelsea*, University of Chicago Press, 1903) が学究的レベルで編纂され、彼女の全作品を概観できるようになった。さらに再編纂された最新の全詩集が2020年に刊行が予定されている。

アン・フィンチが18世紀の英詩における際立つ存在であることは明らかにされつつあるが、彼女の経歴や評価を概観して示されることは、アンが「サロン」の主催者でもなければ、顕著な社交活動が残されているわけではない。だが、文壇を代表するポーブがアンの詩人としての誕生に関わっていることの意味は大きい。ペンによる表現の自由を主に知識階級の男性が享受していた時代に、アンの文学的資質に見られる、今世紀においても色褪せることのない現代性とはいかなるものであろうか。

知的・学問的教育と自由な言語表現は、当時のほとんどの女性にとって手の届かない禁じられた領域であったことは歴史が示すところである。だが、その時代の束縛から自由になろうとする女性の姿を浮き彫りにしたアンの作品が残されている。女性が詩作を行うことに対する社会の偏見、その偏見を巧みにかわそうとする作者の機知を読み取ることができる。抗しがたい書く行為に対する「弁明」(‘The apology’) そのものが主題となっている作品である。

’Tis true, I write; and tell me by what rule  
I am alone forbid to play the fool,  
To follow through the groves a wandering  
muse  
And feigned ideas for my pleasure choose?  
Why should it in my pen be held a fault,  
Whilst Myra paints her face, to paint a  
thought?  
Whilst Lamia to the manly bumper flies,

And borrowed spirits sparkle in her eyes,  
Why should it be in me a thing so vain  
To heat with poetry my colder brain?

But I write ill, and therefore should forbear.  
Does Flavia cease now at her fortieth year  
In every place to let that face be seen  
Which all the town rejected at fifteen?  
Each woman has her weakness; mine indeed  
Is still to write, though hopeless to succeed.  
Nor to the men is this so easy found;  
Even in most works with which the wits  
abound

(So weak are all since our first breath with  
Heaven)

There’s less to be applauded than forgiven.

(私が物書きをしているというのは本当のこと。教えてくださらないかしら、どんなお達しで、／他の方はともかく私だけが許されないのでしょうか。私の気晴らしに道化のまねごとをしたり、／木立の中を逍遙する女神の後を追ったり、／他愛のないことを想像するのはなぜいけないのかしら。／マイラは化粧を施しますが、／自分のペンで、私が思想を彩るのは悪行だとなぜ見なされてしまうのでしょうか。／レイミアの場合、男らしい胸板に飛び込み、／その瞳には借り物の精神がきらきら輝いているのに、／私の凍え始めている脳みそを詩で温めることが、／なぜそんなにも無駄なものになってしまうのでしょうか。／けれども、私は下手くそです。ですから、書くのを思いとどまるべきなのでしょう。／フラヴィアは今40歳を迎えペンを捨てるのかしら、／様々な場にその姿を現わすためには。／15歳の時に彼女を街中が拒絶したのですから。／女は、おのおの弱点を持っており、私の弱点はそうでも、／未だにペンを捨てないことです。文筆の成功など望むべくもありませんのに。／殿方にとっても、こうした望みはそれほどたやすいとは思えません。／機知にあふれる、ほとんど作品さえ

も、／（神から生を初めて賜ってからすべての者は弱い存在ですから）／許しを得るよりも喝采を得る方がまれなのです。）

女性が中心となったサロン形成にアン・フィンチが具体的に貢献したという史実は現在のところ見当たらない。だが、女性の文章表現に対する情熱とともに、文筆家としての才能の芽生えが、当時のポーブ等の大物文人に徐々に見出され認められ、女性の書き手の社会進出の嚆矢となったことは明らかであろう。この後、モンタギュー夫人を代表とする女性貴族を核としたサロンが誕生する。そのサロンには、今後の文壇を牽引する、あるいは文化を創出する才能を持った文人が続々と訪れるほど、社会的地位の重みを増してゆく。

#### 付 記

本稿は学術研究助成基金助成金（基盤研究C 一般）に採択された（課題番号 17K02552 研究課題名 グレゴリ夫人と文芸サロン——情報・教育・活動の領域）の研究成果の一端である。

#### 参考文献

- Literary Salons Across Britain and Ireland in the Long Eighteenth Century* (Amy Prendergast, Palgrave Macmillan, 2015)
- Early Women Writers: 1600-1720* (ed. By Anita Pacheco, Addison Wesley Longman, 1998)
- Anne Finch and Her Poetry* (Barbara McGovern, the University of Georgia Press, 1992)
- The Poetry of Anne Finch* (Charles H. Hinnant, University of Delaware Press, 1994)
- The Poems of Anne Countess of Winchelsea* (ed. By Myra Reynolds, University of Chicago Press, 1904)
- 『公共性の構造転換』（ユルゲン・ハーバーマス、細谷貞雄・山田正行訳、未来社、1994年）
- 『ヨーロッパのサロン』（ヴェレーナ・フォン・デア・ハイデン＝リンシュ、石丸昭二訳、法政大学出版局、1998年）
- 『近現代イギリス女性史論集 欲張りな女たち』（伊藤航多、佐藤繭香、菅靖子編著、彩流社、2013年）
- 『レイディ・グレゴリ アングロ・アイリッシュ貴婦人の肖像』（杉山寿美子、国書刊行会、2010年）